夢日記

夢日記

これは、私が見た夢をそのまま記録したものです。
寝ぼけた状態で記述したので、文章は荒っぽいのでご了承ください。
夢本来の意味は、見た本人しか理解出来ないと申しますが、それでも他人の夢というのは興味深いものがあります。
それでは、皆さん、不思議の夢の世界にようこそ。

猫吉

平成十九年某日

同僚なのか部下なのか分からないが、三十歳ぐらいの女性に「これじゃ、仕事は間に合いませんよ」と言われて、本を渡される。

トイレのような個室に入ってから、本を開くとそれは将棋の本だった。

その部屋を出ると、自転車に乗って、急な坂を下っていた。右手でハンドルを握り、左手にはスコップを持って、走っている。このスピードなら時速三十か四十キロは出ているなと考える。

走りながら、左のスコップをたまに地面に立てる。そうやって左右のバランスを取っているようだ。

初老の女性が園芸用の小さなスコップを使って、地面を掘り返しているのが見える。自分の持っているスコップを貸してやると喜ばれるのではと思う。

そう思いながら、初老の女性の傍を通り過ぎる。自分の持っているスコップが急に邪魔になって、どこかで捨てなければと思う。

下り坂が終わると、その先は商店街になっている。

商店街の路地にスコップを捨てる。誰かに見つかったらどうしようという、後ろめたい気持ちに襲われる。

その路地を歩いて行くと、道の左右にクリーム色をしたものが見える、どうも蛆のような虫がいっぱい集まっているようだ。

そのまま進むと、目の前に高架橋のようなものが出現したので、腹ばいになって、その下を潜る。そのときに、手や肘に小さな虫が付着してくる。

気持ち悪いので、ついたものを払い落とすが、また高架橋が現れ、腹ばいになって進む。

潜り抜けて少し進むと、主婦のようなかっこうをした数人の中年女性が歩いている。すれ違ってから、後ろを向いて、彼女達を見ると、高架橋をすり抜けて歩いていくのがわかる。

三回目の高架橋を潜り抜けると、少し先に行った左側に、公園があるということを思い出す。

記憶の通りに進むと、公園があり、噴水が水を吹き上げている。

体についた虫をきれいにしたくなり、噴水に近づくと、噴水は一際高く水を吹き上げて、その水が体にかかる。

もっと、水を浴びたくて、噴水の中心に近づくと、急に体が沈んでいく。

体がそのまま入るような穴があいていて、そこに落ちていくのである。私の体を青い水のようなものが包んでくる。

しかし、冷たさや、水のような感触が感じられない。粘着性の薄いゼリーのようなものの中に沈んでいくような気分だ。

すると、浮力のせいなのか、体が浮かんでいく。

目が醒めた。

平成十九年九月十五日
　居間で食事をしていると、通りに面した窓のスリガラスに人間の影が映る。誰だろうと思い、窓に近寄った。
　のっぺりとして表情に起伏がない中年男性が、私の部屋を覗き込んでいる。
　何をやっているのだろうと思ったが、そのうちいなくなるだろうと考え、また食事を始める。
　ウーというような唸り声が聞こえるので、また窓の方に近づくと、今度は壁が壊されて四角にあいたところに男の顔がぴったりと嵌りこんでいる。
　額縁に顔がすっぽりとはまり込んだ状態の男がこちらを見ている。
　目が醒めた。

平成十九年九月十六日

平成十九年九月十六日
　山の斜面に露天売りのように果物が置いてある。
　私はそこを飛び越そうとジャンプしたが、ミカン数個が足にぶつかり、さらに勢いあまってダンボール箱をひっくり返した。
　こりゃまずかったなと思い、胸のポケットに入れている財布に触る、こちらが弁償する様子を見せれば、ひょっとしたら相手が「いいよ、払わなくても」と言ってくれることを期待したからだ。
　中年のずるそうな表情を浮かべた女性が「十万円だね」と言う。
　そんなバカな、わずかなミカンが傷ついただけだろ、なんでそんなに高いのだ、と思う。
　これは罠にでもハメられたのかと思うと怒りがこみ上げてくる。
　オバサンに説明を求めると、彼女の心理状態が透けて見える。まるで動画を眺めるように彼女の心理が映像化されて再生されるのだ。
　オバサンは一升瓶にドクドクとオレンジ色の液体が溜まっていく様子を思い浮かべている。それを見た私は、それだけの量のミカンがダメになったはずがないだろ、と思う。
　場面が変わる。
　古代の墓場みたいなところにいる。遺跡みたいな場所に、地下に長く伸びた穴が開いている。
　私は何か分からないものを、何処からか取り出しては、その穴に押し込んでいる。
　私の左側に横穴があいていて、そこに入れているのだ。
　押し込む時に横穴の奥に頭蓋骨らしきものが見える。
　左側の穴が一杯になったので、右側の穴に入れようとして手を突っ込むと、何かにぶつかる。ああここにも頭蓋骨が入っているのだなと思う。
　目が醒めた。

平成十九年九月二十七日

平成十九年九月二十七日
　知り合いの自動車を追っているうちに、大きな神社（伊勢神宮のような）に入ってしまう。車が池の水際に駐めてあるので知り合いが来た事が分かる。階段を上っていくと屋根裏部屋のような狭いところに出る。
　そこから貧相な体をした貧乏そうなイタリア人男性が出てくる。知り合いと違う男なので「あなたがあの車の持ち主か？」と聞くと、「そうだ」と彼は答える。
　私はその男と入れ違いにその場所に入る。
「狭くて服が汚れる」とサインペンで書かれている段ボール箱が、無造作に置いてある。這いずるようにして狭い場所を抜けると広いところに出る。
　何度も夢の中に出てくる神社である。
　またここか。いつも目的地に行こうとすると、ここに出てしまってたどり着けないんだよなと思う。
　広い所から出ると、螺旋階段のようなものがある。登っていくと人でいっぱいだ。
　私は何故かドテラを着ている。子供が狭い螺旋階段を走るように動き回っている。その子供が私を叩いて去っていく、その子供はどうしたことか、ドテラを着ている人間にだけ叩いたり触っている。
　螺旋階段を降りると、質素な売店が並ぶ場所に出る。ここではなく、もっとにぎやかな場所に出ないといけないと考える。
　誰かが私の後を追ってくるのがわかる。
　さっき、私の体を叩いたヤツかもしれないと思って逃げる。川原のような場所に出る。男が手に石を持って、私の事を呼んでいる。
　なぜか頭にきたので、その男のほうに近寄った。すると、男が石を投げてきて、それが私の指に当る。
　さらに怒りがこみ上げてきたので、走って行き、男を捕まえる。
　まわりを見ると、警察官がすぐ傍にいる。これはさいわいと、現行犯で逮捕してくれと警官に言う。

　何故か捕まえた男が私に電話をかけてくる。
　話をしていると、違う男が「許してくれ」というような事を言うので「刑事でも民事でも裁判をしてやるぞ、私はそうした事が好きなんだから」と私は言う。
　取りあえず手当てをしなければというので、旅館の一室に案内される。
　外がだんだん暗くなっていく。この分だと今日中には、名古屋に帰れないのではと思う。
　この場所が何処なのか分からないとどうしようもないなと考え、女将のような中年女性に「ここは何処ですか？」と訊ねる。
　すると女将が住宅地図みたいな物を渡してくれる。それを見るのだが、建物の輪郭が書いてあ

るだけで、目印になる建物の名前などが一切書いてない。
　どこなんだと困惑していると、女将が「前の方に書いてある」というので、３頁目を開き、地図の何処がこの場所なのかと聞くと、女将が場所を指差すのだが、全体的な場所がよく掴めない。
　私は「こうした地図はこのようにこのページが全体の何処に該当するのかちゃんと書かないといけません」と言いながら、地図に鉛筆で正方形を書いてそれを四分割して、それぞれに該当するページの番号を記入する。
「ほらこうすれば全体のどこに、このページが該当するか分かるでしょ」と説明する。
　内心こんなことも書かないようじゃこの地図を作ったやつはド素人だなと軽蔑する。それに比べたら私は結構物を良く知っているなと思う。
　女将が感心したような表情を見せるので、うれしくなる。
　目が醒めた。

平成十九年九月二十八日
　少し歩いたところにある丘に忘れ物をしたので、取りに戻るために歩いている。
　手に何かを持っているが次第にそれが邪魔になり、捨てようと思う。しかしその辺に捨ててしまうことに抵抗というか罪悪感を感じている。
　丘を登っていると手ごろな窪みがあるので、ここなら分からないだろうと思い、そこに捨てる。
　そこを離れながら、振り返ってみると、かなり大きな白い物体（クッション材のような物）が窪みからはみ出るようになっているのが見える。
　道路に出ると、大きな交差点になっていて車が走っている。交差点を渡らないと目的地の丘にたどり着けない。横に男が一人立っていて交差点を歩いて渡ろうとしているのが見えた。
　私もその男の後をついていけば、渡れるだろうと思う。男が渡りだしたので、あとをつける。すると急に道路が広くなり、これでは渡りきるのは無理だろうと思い、引き返す。
　道路の脇に配水管がある。ここを潜れば、道路を渡る事が出来ることを知っている（前にも何度も潜ったという記憶がある）。面倒だけど、潜って渡る事にする。
　配水管は体よりも少し大きいくらいで、中に入ると真っ暗で先が見えない。
　両手を伸ばして配水管の中に入る。ぬるま湯のような水があるので、泳いで前進する。
　配水管から出ると、そこは温水プールのように広い場所になっていた。
　手にボロ雑巾のような物を持っているので、手洗い場でその雑巾を絞る。あまりに汚いので、そこに雑巾を置いていく。
　少し歩くとまた配水管がある。
　目的地の丘にたどり着くためには、この配水管に入らなければいけないとは分かっているのだが、また潜るのかと思うとうんざりした気持ちになる。
　人が何人もウロウロしているのが見える。どうして私はこんなことをしなければならないのかと思い、大きな声で「〇〇の馬鹿やろう」と叫んでしまう。
　配水管を潜るためにその場所に近づく。
　目が醒めた。

平成十九年九月二十九日
　自分の家にいる。何かのフラグが立って変身しないといけない事に気づく。
　隣の部屋に行く。箱に入った文学全集のような本が、きれいに部屋一面に並べられている。どうやらこの本を売って生活しているらしい。
　向こうから私に向かって、小柄な薄い生地の洋服を着ている中年女性が歩いてくる。そういえば、親戚の叔母さんが来るという事を聞かされていたなと思い出す。
　叔母さんがなにやら小言のような事を私に言う。
　うるさいなと思う。そこでまわりの本を紹介しながら、自分がちゃんと商売をやっている事を本を手に取りながら説明する。
　早く変身しなければと思い、大きな机の陰に隠れて変身するために着替えようとズボンを脱ぐ。
　するとのっぺりとした顔をした私と同じ年頃の男が現れる。
　私は一冊の本を手に取ってから男に「この本を売るといくらになると思う？　百五十円かな」と言う。
　男は「私が売ったら六十五円だったよ」と言う。
　男の顔がテカテカと光っている。ＣＧで描いたような顔だなと思う。
　ズボンを脱いで、さて変身用の服に着替えようとすると、右隣に男が現れ、同じように着替えようとしている。こいつも変身するのかよ、と思うと、急に隣の男が邪魔な存在のように感じる。
　一言文句を言おうとすると、私の左隣にも男が現れて着替えようとしている。
　そこで私は「みんな、これからは変身する場所をキチンと決めておこうぜ」と言った。
　目が醒めた

平成十九年九月三十日
　私は教室にいる。
　難しそうなマンガを読んでいると、教師が入ってきて授業が始まった。
　教師が「仮定法と英作文」と言う文字を黒板に書いている。英語の授業かと思いカバンから教科書を取り出そうとする。
　黄色い表紙が破れてひどく黄ばんだ古色蒼然とした新書サイズの本が見つかる。
　どうやら英語の教科書のようだ。しかし、こんな古い本が教科書のわけがないと思う。この本では机の上に出しておいてもすぐに違うことは分かってしまうだろうという気がする。
　他に教科書がないかカバンの中をかき回す。
　ビニールに包まれた背が白い上下巻の本、マンガ雑誌、趣味の本、など何冊も入っているのに、教科書らしき本が見つからない。
　探しているうちに、どうして教科書が一冊もないのかと疑問に感じる。
　どうやって今日一日を過ごすのか、いや過ごしてきたのか、という思いが浮かんでくる。それどころか教科書を買ったという記憶がない事に気が付く。私は三年生のはずなのに、今まで教科書も無しでどうやって進級していたのだろうと思うとたまらなく不安になる。
　隣の男に「教科書が無いから、一緒に見せてくれないか」と頼みこんだ。
　男は人の良さそうな声で「だけど、そんな事は今までになかったから」と困ったように言う。
　教科書を見せてくれるというのはよくある話ではないのかと思うが、男の表情からは悪意らしきものは感じられない。
　しょうがないので、なんとか教科書にみえそうな本を探すのだが、無い。
　教師がこちらに向かってゆっくりと歩いてくるので、直接教師に教科書を忘れたことを言うしかないと決意する。
　教師が横に来たときに立ち上がって「すいません、教科書を忘れましたので、隣に見せてもらいたいのですが」と言う。落ち着いて、ハキハキとした声で言っているのが自分で分かる。
　私のほうが背が高いので、教師を見下ろすように見ている。教師は驚いた表情をしたあと、黙り込んでいる。
「なんとかお願い出来ませんか」と強く畳み掛けるように言うと、教師が同意を示すように頷くので、席に腰を下ろす。
　教室中の人間が拍手をしている、なんだか誇らしい気持ちになる。
　目が醒めた。

平成十九年十月三日

平成十九年十月三日
　テレビでやっているドラマを見ている。
　頭の中に平井和正原作という字幕が浮かんでくる。
　最初は、第三者的に見ていたのだが、時々そのドラマの配役と入れ替わる。
　住んでいる家から煙が出ていて、焚き火のような臭いがする。
　家から出てどこから煙が出ているのか探すのだが、分からない。
　狭い山道を少し歩いてから自宅を見るのだが、やはり煙の出場所は不明だ。
　家に戻ろうとする途中で、タウンエースのような白い車が手前の家に入っていくのが見える。わずかに開いた戸から吸い込まれるように入っていく。
　その家に近づいて見ると、玄関の引き戸は幅二十センチほどしかない。どうやって入っていったのか不思議に思う。中の様子を覗くと、内部が山になっていて、奥のほうが崖になっている。
　その崖から車が落ちそうになっていて、小学生くらいの男が光線銃みたいな物を抱えて撃っている。
　若い女性の悲鳴が聞こえるので、車の中に可愛いらしい小学生か中学生の女の子がいることが分かる。以前、出てきた姉妹のどちらかだと思う（怪奇大作戦とかウルトラQのような昔のドラマに出てくる、スカートをはいてブラウスの上にセーターを着たような子役をイメージ）。
　これはあの叔母さんが自分の娘にするために姉妹のどちらかを殺しているのだろうと直観する。これは凄い動機設定だな、よくストーリーが出来ている。
　戸口から出ると、光線銃をかかえた男の子が出てくる。自分の背丈ほどある光線銃を抱えている。顔の額がカニの腹部のようになっている（これはどうやら昼にニコニコ動画でプレデターを見ていたことに関係ありそうだ）。
　その男の子をつかんで叩きつける。すると頭が石にぶつかって粉々になり、破片が放射状に飛び散る。
　目が醒めた。

平成十九年十月四日

平成十九年十月四日
　寂れた商店街のような所で、猫に出会う。アメショー風の猫が親猫、子猫を含めて五匹ほどいる。手に取って遊ぶのだが、なんだか立体的ではなく、平面的な感じがする。

　将棋をさせられる。相手は今は亡き原田泰夫八段に似た、古武士のように小柄だが引き締まった体をしている。
　三手指すと、詰められる。盤上を見渡すと確かに自分の王は逃げられない。
　負けたなと思う。しかし何か違和感があり、良く見ると角が五枚もある（実際の将棋は二枚）。
「どうして角が五枚もあるんだ、おかしいだろ」と言うと、「これは中将棋（古い将棋の一種で今の将棋の倍ほども駒がある）だぞ」と言われる。
　本当かよと盤上を見ると、確かに今の将棋ではありえない駒がある。たしかに中将棋だなと納得する。
　目が醒めた。

平成十九年十月六日

平成十九年十月六日
　校庭のような広い場所を歩いている。夕暮れ時のように薄暗い。
　私はパソコンを買おうと思っている。
「高性能のパソコンにしようか、それともノートパソコンにしようか」と考えている。
　その場所には人間が溢れかえっている。歩いているうちに知り合いを発見して「おう、久しぶり」というように合図を送る。
　相手もこちらを見て分かったはずなのに、そ知らぬそぶりで私の横を通り過ぎていく。その知り合いは高校生くらいで、細身の体に眼鏡をかけ顔が日焼けして茶褐色のようになっている。
　私がその場所の中心部分に進むと、アナウンスが聞こえてくる。
「これがあれば、税関でも割引されるとても便利なカードです、当選番号は150番」と言っている。
　そうか、このカードを求めて皆が集まっているのだなと気が付く。しかし私は抽選券を持っていない。
　がっかりすると同時に、建物の前にパソコンのカタログが置いてあったことを思い出し、せっかくだから、カタログでも貰って行くかと、その場所に行く。
　建物の入り口に木製のラックが置いてある。その上の所にパソコンのカタログがあったはずと思い、手を伸ばすと、何故か旅行のパンフレットに変っている。
　なんだ、無くなっているじゃないか、とラックの下側に目を落とすと、新聞の号外みたいなものが置いてある。
　中日のユニフォームを着たコアラの写真が大きく載っていて、「中日奇跡の優勝！！」と書いてある。
　おかしいな、巨人が優勝したはずなのに、と思う。
　目が醒めた。

平成十九年十月七日

平成十九年十月七日
　布団に入って眠っている。何かに気が付いて目が醒めた。障子に和服を着た女性のシルエットが映っている。髪の毛も時代劇に出てくるような日本髪だ。ただならぬ気配に飛び起きる。
　障子を突き破って女性が倒れかかってくる。
　私を殺すために来た女とわかる。女性は必殺シリーズに出てくる山田五十鈴にそっくりである。分厚く塗られた化粧からして相当な歳だろうなと思う。
　女性の後ろから小学生くらいの男の子が現れる。短刀のような物を手に握っている。どうやらその短刀で女性を刺したために、私が助かったようなのだ。
　子供は倒れている女性を更にメッタ刺しにしている。何度も何度も狂ったように刺している。やっと刺すのをやめて立ち上がると、両手が無い。胴体だけの体にセーターのような物を着込んでいる。この女と子供はさっきまで見ていた夢に出てきていたな、と思う。
　私はあわてて部屋から出る。廊下を走ってから「そうだ警察に電話しないと、私が殺人犯にされる（さきほどの女性を殺したと思われる）」と思い、電話をするために部屋に戻る。
　部屋の左側の雨戸が開けられて、女性の体半分ほどが庭のほうに出ている。逃げ出すつもりだなと思い、後を追う。
　庭に出ると、女性が芋虫のように体をくねらせて前に移動している。何か武器になるものはないかと探すと、塀に使うブロックが落ちているので拾う。
　そのブロックで女性の頭を思いっきり殴る。血が出るわけでもなく、頭が陥没するわけでもなく、ゴム人形を殴っているような感触だ。十数回殴る。
　殴り疲れて、ブロックを地面において、女性を見た。
　目が醒めた。

平成十九年十月十二日
　広い教室のような所で、テレビに写る映画を見ている。後ろの方で映画のタイトルを言う声がする。
　五、六十人はいるだろう教室は静まり返って、皆、真剣にテレビに見入っている。
　どうやらクラブ活動で短編映画を作っていて、それを上映しているらしい。部屋の左端にいる私は映画を見ながら、時々後ろを振り返ったりする。
　何時の間にかテレビがまっすぐではなく、左側に傾いている。これでは左端にいる人間には見やすいだろうけど、反対側にいる人間は見難いだろうなと思う。皆の表情を見てみる。右側にいる人間までもまっすぐ見つめている。
　そんな状態で画面を見られるのだろうかなと思い。伸び上がって見ると、テレビの向こうに、もう一台のテレビが隠れるようにあり、同じ映画が写っている。
　なんだもう一台あったのかと安心する。しかし上映される前には電源が入っていなかったのに、いつの間に電源が入ったのだろうかと不思議に思う。
　何本も上映される。どれも面白い作品だったなと思う。上映会が終り、全員教室から出て行く。
　トイレに行こうとすると、すでに十人くらいの列が出来ている。そういえば、ここは合宿所みたいなところで風呂も食事も皆と一緒なんだよなと思う。
　トイレに並ぶ列の横に男が座り込んで、コピー用紙に書かれた劇画みたいなものを読んでいる。
「ちょっと見せてくれよ」と言うと、「いいよ」という返事だったので、手に取って見る。
　乱暴な線で書かれた荒っぽいタッチの劇画というよりも下書というような物だった。書きなぐったような縦書きの文字で台詞が書かれている。
「鷹の爪に所属している」の後に経歴みたいな物がくどくどと列挙されている。多分主人公の経歴を最初に紹介しているのだろう。
　下手な台詞だなと感じたので「『鷹の爪』というのはどんな団体なんだ」と男に聞く。
「それは主人公だけが所属している、一人でやっているプロレス団体なんだ」という答えだった。
「そんな誰も知らない団体を最初に出しても、どういう団体なのかキッチリと説明しないと、読者には分からないのではないのかな」と私が言う。
「そんなことはないだろ」と男が興奮した口調で反論してくる。
　目が醒めた。

平成二十年五月二十二日
　教室にいる。
　窓の外では茶色く濁った水が押し寄せて来ていて、波しぶきがたち、いまにも窓ガラスにかかりそうになっている。まわりは畑や山が広がっているから、海というよりも湖が氾濫しているのだろう、と思う。
　こんな酷い状況で、家に帰れるのだろうかと心配になる。
　前の席にいる男が「恵那（伊那とも聞こえる）に行ったんだからゼリーの一つも持ってきてもいいんじゃないか」と私に文句を言っている。
　彼は明らかに学生というよりも中年男に見える。というのも無精ヒゲを伸ばしているし、がっしりとした体格をしていて分別くさい顔をしているからだ。どことなく見覚えがあるから、たぶん同級生なのだろう。まわりをみると同じような中年男が学生服を着ている。しかも男ばかりだ。
　前に座っていた男が「教師に、こんな状況じゃ授業なんて出来ないから、授業を終わりにして皆帰れるように言ってくる」と叫んで、教室から出て行く。
　すると数人が一緒に出て行って、急に教室はがらんとして、寂しくなる。
　こんなひどい天気で外に出て行けるのかと、窓を見るといつの間にかすっかり晴れていて、山や畑が広がる田園風景になっている。
　目が醒めた。

平成二十年五月三十日

平成二十年五月三十日
　いつもの街を自転車で走っている。交差点に出るが、いつもと違う方向に行きたくなって、右側の道に進む。
　右側には線路があり、それに沿うように道があって、この場所は初めてだなと考える。
　どっちにしても適当に進んでから、左の方に折れれば、いつもの場所にたどり着くだろうと、頭の中に地図を浮かべて考える。

　イムチンと呼んでいた昔の同僚と狭い事務所の中にいる。部屋にはもうひとり若い女性がいる。どうやらバイトのようだ。
　部屋の壁には地図が貼ってあり、所々道路の一部が赤く塗ってある。たぶん測量した道路をわかるようにしてあるのだろう。同じ所の測量が出たら、再利用するためなのだろうと思う。
　若い女性が部屋を出て行く、仕事が一段落付いたのだろう。
　イムチンに「××測量は仕事をちゃんとやっているのか？」と尋ねると、「あそこは要領がいいからちゃんとやっている」と返事がある。
　こんな狭い事務所で仕事をしているようでは、イムチンも大変だなと考える。
　仕事が終わったので、事務所からイムチンと一緒に出る。駅前の商店街みたいな所を二人で歩く、食事でもするつもりなのだなと思う。
　少し歩くと、寂れたビルの前でイムチンが足を止め「この角に面白い店があるから、ちょっと見ていこうぜ」と言うので、面白そうだからつきあう。
　ビルの裏側に回ると、リサイクルショップのように様々が商品が無造作に並んでいる。
「そういえば、この店知っているよ」と私はイムチンに話す。どこで聞いたか、テレビでみたのかわかないのだが、確かガラクタを集めた店だったなと思う。
　いろんな商品を見ていると、古いパソコンが並んでいる、PC-98（昔国民機と言われたNECのパソコン）の古いヤツがあるといいなと思って、じっくりと端から端までみるが、新しい型のパソコンばかりで見つからない。
　見覚えのある女性が近付いてきて「結構良い物があるわね」とうれしそうに話しかけてくる。そういえば私はこの女性と付き合っていて、女は安い家財道具が手に入りそうなので喜んでいるのだなと思う。
　そうだ、私も頑張って安いものを見つけないとな、とやる気が出てきたので、違う場所に移動してまた探し始める。
　知り合いの中年夫婦が来て「良い物が手に入ったから一緒に食べないか」と私に話しかけてくる。
　それもいいなと思って、中年夫婦のあとをついて行く。店の一角に粗末なテーブルが並べられている。
　旅館の宴会場みたいにテーブルの前に座って食べる形式のようだ。私は座ると、男性がカニを

渡してくるので、受け取り食べる。カニの身が口からはみ出しそうになるほどボリュームがある。

　これはうまいなと思うが、付き合っている女性がいないのに勝手にこんなうまいモノを食べていたら、きっと怒るだろうなという考えが浮かんできて、ちょっと罪悪感に苛まれる。

　目が醒めた。

平成二十年六月三日
　食堂にいる。社員食堂とか役所の地下にあるような実用本位の食堂だ。座ろうとするが、空いているテーブルはなくて、これは相席するしかないなと思う。
　座る前に何を食べようか決めないといけないと考えていると、OLふうの若い女性が二人座っているテーブルの端に「新メニュー」と目立つ赤い字で書かれたポップが立てられている。
　そのテーブルに近寄って、新メニューを見れば何を食べるのか決める判断になるだろうと思って、そのポップを回転させて裏側をこちらに向けた。
　裏側は真っ白で何も書かれていなかった。
「なんだよ、これ」と呟くと、座って食事をしていた若い女性が、私の方を見ながら馬鹿にしたように笑った。
　目が醒めた。

平成二十年六月十五日
　朝、バスで仕事先の現場に行く。
　現場は森のある広い公園のような場所だ。そこで同僚が三人待っている。どうやら自分が仕事の監督をしないといけないらしいと、同僚たちの話からわかる。
　四人で仕事をするのだが、仕事の内容がわからない。自分の仕事も抱えているので、早くこの仕事を終わらせなければと思っている。
　深い森のような所にひとりでいる。
　地面はクローバーのようなもので敷き詰められていて、中心部には白い花が直径一メートルくらいに置かれている。気持ちが良くなって、その場所に横たわると眠くなってしまいそのまま寝てしまう。
　眠りから覚めると、かなり時間が経っている。あたりの様子からして昼をとっくに過ぎているだろうとわかる。
　結局仕事を何もしないままに、一日が終わってしまったと思う。それにしても同僚は何をやっているんだ、私を起こしてくれればいいだろうに、と不満に思う。
　とりあえず、同僚を捜そうと森の中から出ると、そこは見晴らしの良い広い所になっていて、丘の上に人間が十人ほどいるのが見える。
　近付いてみると、同僚はいない。公園に遊びに来た人間ばかりだ。
　誰かに電話でもして状況を聞かないとまずいなと思い、携帯電話を取り出すが、電話のかけ方も、同僚の電話番号も思い出せない。
　どこかに電話番号が書いてあるはずと、持っていた鞄を開けると、分厚い六法全書が出てくる。なんでこんなものが入っているんだと不思議に思う。
　さらに探すと、メモ帳のような物が見つかる。パラパラと捲ると後の方に電話番号と書かれている。これだ、やっと電話が掛けられるぞと思う。
　電話をしようと、暗く狭い路地を歩いている。いつの間にかあたりは暗くなっている。早く会社に帰ろうと思い、朝来た道を思い出しながら歩く。
　暗くなっているので、賑やかな明るい方へ道をたどる。
　桜ヶ丘というバス停まで行けば、会社に戻れるはずだと思う。途中バス停を見つけたが、ここではなくもっとバスターミナルのような広い場所だったなと思う。
　そのバス停から離れて、引き返してすぐの交差点を渡ろうとする。
　目が醒めた。

平成二十年七月十一日
　豪華な邸宅の一室で私を含めて男女六人くらいがダラダラと過ごしている。
　金持ちの親を持つ女性がひとりいて、それ以外の人間は彼女の所に遊びに来ているだけだ。皆二十代前半、暇をもてあましているといったふうだ。
　私はその金持ちの娘に淡い恋心を抱いている。彼女を見ていると、胸が疼くような甘い気持ちになる。このまま、いつまでもここにいたいのだが、外が暗くなると、ここから出て行かなければいけない事がわかる。
　家から出ると、四十過ぎの殺人犯にお好み焼きの生地を作らされる。
　私の首に細い縄が付けられていて、生地をしっかりと作れないと殺される。
　部屋の中には十人近くの男女が居る。私はまだだが、四人ほどすでに殺されている。
　殺された人間は、天井からつり下げられているのでわかるのだ。
　女が生地を作っている。最初は丸く出来ていたのだが、そのうちに材料が薄くなってしまい、内側がなくなり、外側だけの状態になってしまう。わかりやすくいうと、外側だけが丸い紐みたいに残っているのである。
　犯人は「ちゃんと作れ」とわめいている。
　いつのまにか私は彼女のすぐ横に立っていて、作っているのを観察している。
　もうダメだな、こいつは殺されるなと思う。
　次は誰だろう、残りの人間もだいぶも減っているし、次の犠牲者は私になるのではないのかという考えが浮かんでくる。
　目が醒めた。

平成二十年七月十六日

平成二十年七月十六日
　冷蔵庫の上に電子レンジがついている。
　私は料理を作っている。材料を暖めれば誰でも簡単に出来るはずなのに、ボタンを色々操作してもうまくいかない。
　自分の娘らしいスラリと手足がのびた小学生が帰ってくる。
「ただいま」と屈託のない挨拶をして部屋に入ってくる。
　テレビのコマーシャルにでも出てきそうな、こんな子供がいたらなと誰でも思う可愛らしい娘だ。
　横にいる小学生くらいの男の子が、私の方を見て「ちゃんと出来た？」と聞いてくる。
「どうかな、ちゃんと出来ているといいけどな」と私は返事をして、電子レンジを覗く、すると紙の容器に入っているのは、ぬるいべしゃべしゃとしたイカの丸焼きである。
　やっぱりダメだったかと思う。
　目が醒めた。

平成二十年七月二十一日

平成二十年七月二十一日

　ホテルの一室らしき場所で、女と一緒にベットの上にいる。

　私たち以外にも、二人の男女がいる。都合男女四人が酒を飲んで話をしている。

　窓から見える夜景は美しい。どうやら外は海のようだ。

　会社帰りに何かの祝い事があって、ここで祝杯をあげている。

　私の横にいる女は二十代後半、少し小太りした体型をして、楽しそうに笑っている。

　どうやら私と彼女は深い仲のようだ。彼女の親しいというよりは馴れ馴れしい態度からは、体の関係を持った女特有の雰囲気を感じる。

　他の二人が、用事があると言って部屋を出て行く。

　私と彼女はそれを見て、急にいちゃつき始める。それまでは、ベットの上に普通に腰掛けていたのである。

　二人して寝転がってお互いの体をまさぐる。彼女の眼は酒に酔っているというよりは、別のものに酔っているかのように、媚びを含んでいる。

　私は、彼女の積極的な態度に従っているが、どこか醒めている。

　部屋を出て行った二人が帰ってきたときに、彼女とこんな格好をしているのを見られたら、二人はデキていると思われるだろうと不安になる。

　私と彼女の仲を世間に知られるとまずいという気持ちが私の中にあるようだ。

　そう思ったとたんに、私は冷静になり、体を起こして何事もなかったように装う。

　帰ってきた二人とまた飲み直すが、心の中では早く家に帰らないと、明日の仕事に差し支えるなと思っている。

　部屋を出ると、狭い通路になっていて、正面に受け付け窓口があり、ラフな服装をした二人の中年男が受付に詰め寄っている。

　二人は刑事のようで、誰かを捜しているという事が私にはわかる。

　階段を上がってきたのか一人の男が姿を見せる。いかつい顔をした三十代の男だ。何か焦っているような、せわしない態度だ。

　その男は二人の刑事の後に並ぶと、私の方に顔を向ける。私と眼が合う。

　男の顔を見たとたんに、そういえば夢の最初の頃にもコイツは出ていたよなと思った。

　目が醒めた。

平成二十年九月一日
　昼下がりの街を歩いている。昔、仲の良かった会社の同僚を見つける。私がイムチンと呼んでいた男だ。
　少し大きめの喫茶店みたいな所にいる。中には学生服姿（高校生）の硬派のヤンキーが何人かいて、イムチンと楽しそうに話している。
　イムチンがこんな場所に出入りしていたとは意外だなと思って、店内を見回した。
　彼が椅子に腰掛けたので、私も座る。狭い所の一番角だ。
　イムチンがいつの間にか高校生のような制服姿になっている。
　私は彼の肩を叩いて、こちらに注意を向けてから「新左はどうしている？」と質問をした。
　新左というのは昔同じ職場にいた、要領が悪いうえに、愛想がなくて職場では評判が良くなかった男だ。
　イムチンは「結婚したよ」と当たり前のように言った。
「結婚しただと」
　私は思わず大きな声をだした。あいつだけは結婚とは無縁だと思っていたからだ。
「あいつが結婚しても、生活できないから、ヒモみたいになるしかないんじゃないか」
　私が言うと、彼は「そうかもしれんね」と興味なさそうに相づちを打った。
　しばらくすると、彼は「ちょっと、用事があるから」と言うと、いなくなった。
　彼が戻ってくるまで待ってみるかと思い。その場所にいるのだが、なかなか戻ってこない。
　待ちくたびれて、帰ろうと思って外を見ると、いつのまにか激しい雨が降っている。これでは、雨が小降りになるまでは店から出られないと、店にいることにする。
　店の中では、いろんな人間が出入りしている、帽子をかぶった制服姿の人間が二人、忙しそうにしている。
　彼らの姿はピザの宅配人にそっくりだ。この店ではピザの宅配もやっているのかと思う。
　店内は最初の頃よりも広がって、いつのまにか飲み屋のようになっている。
　外を見ると、雨はやんでいる。
　店から出ようと思って、そういえば金を払わなければと思う。しかし何も飲んだり食べたりしたわけではないと気づく、それどころか物を何も頼まなかったことを思い出す。
　何も頼まなかったのだから、金を払う必要はないな、と考えて、そのまま店から出るが、何気ない様子を装ったほうがいいだろうと、さりげなくドアに向かった。
　入れ違いになるように客が何人も入ってくる。
　一番最後に和服の男が入ってくる。男は何か言っている。
　外に出てから、その男が声からして「藤田まこと」だなと分かる。
　きっと、ちかくにある舞台にでも出ていて、休み時間にやってきたのだろう。
　外はいつの間にか日が落ちて、暗くなっている。繁華街なのだろう、あたりは照明で明るい。
　店を出てからまっすぐに歩くと、大きな道に出た。照明がないので、十メートル先がわからな

いほど暗い。
　どうやら信号が青になったらしく、まわりの人間が走り出したので、私も思いきり走る。
　ずいぶん走ったのに、まだ半分も道路を渡れない。ここは名古屋の百メートル道路で有名な、若宮大通りではないのか、と思い当たる。
　ああ、この道路だったら、一度の信号で渡りきれないぞと思い。走るのをやめて、歩き出す。
　まわりをみると何人か同じように歩いている、というよりは立ち止まっているのがぼんやりと見える。
　道路の中間の場所で一度、車をやり過ごした方がいいのだろうかと思い、あたりを見渡したが暗くて見えない。
　目が醒めた。

平成二十年九月五日
　ブックオフにいる。天井が吹き抜けになっていて、木の茂った公園のような戸外に本棚を並べてあるというような状態である。
　本棚を眺めても、買いたい本は見あたらない。
　棚の向こう側から怒鳴るような声が聞こえてくる。
　好奇心にかられて、本を探すようなふりをしながら、本棚の裏側へと続く道をぶらぶらと歩く。
　裏側に出たところの突き当たりにロッカーが置かれている。それは一メートルくらいの真四角のサイコロ型になっていて、きれいに三段分積み上げられている。
　そこに男二人がよじ登って勝手にロッカーの中から荷物を放り投げている。
　女性店員が店長らしき男に向かって、「なんとかしてください」と懸命に叫んでいる。
　どうやらロッカーには店員の荷物や着替えが入っているのを、二人の乱暴な男がいやがらせのように好き勝手な事をしているようだ。きっとロッカーに鍵を掛けてなかった人間が被害に遭っているのだなと思う。
　それにしても、店長はウロウロしていないで、男たちに毅然と立ち向かうとか、警察に連絡するとかすればいいのにと思いながら、これ以上かかわらないように、私はその場を離れる。
　店を出ると、山の中腹に緑の多い場所がある。そこが散歩道のようになっているので、ふらふらとその道を歩く。
　時代劇の扮装をした人間が何人もいる。
　観光客が時代劇を楽しめるように、エキストラみたいな人間がいるのだろうと思って、そのまま歩く。
　すると、向こうから食い詰めた浪人のような姿の男二人と、町娘のような格好をした女性が数名歩いてくる。
浪人二人は先ほど、ロッカーを勝手に開けていた人間ではないかと思う。他の人間はエキストラみたいな連中だろうな、と分かる。
　私が彼らとすれ違うとき、浪人の姿をしている二人とエキストラの人間がもめているのが見える。
　どうも二人は酔っぱらっているのか、彼女たちに無理難題をふっかけているようだ。
　彼女たちは町娘のような格好をしているが、毅然とした態度を取っている。
　私は、すれ違ってから、しばらく歩いてから立ち止まり、振り返ってみた。
　まだ連中は小競り合いのように体をくっつけて、大きな声を出している。
　それを見ているうちになんだか、腹が立ってくる。
「いいかげんにしろよ」と怒鳴ると、ひげ面の浪人姿の男が私の方を見ると、いきなり木の枝を投げつけてくる。
　私は、その枝を手で払いのける。たいしてスピードがあるわけではないので、簡単にできる。

　すると、私の態度に腹が立ったのか、今度は三十センチほどの大きな枝を投げつけてくる。
　私は先ほどの小さな枝を拾い上げると、それを手にして、投げつけられた小枝を格好良く払いのける。
　今度は落ちている大きな枝を手にすると、剣道のまねをして、上段に構える。
　それを見たひげ面の男はプライドを傷つけられたのか「なんだ、やる気か」と言いながら近寄ってくる。
　相手は、芝居で使うようなギラギラと光る刀を手にしている。
　私は、先ほどの事で自信を得ているので、少しも恐怖感がない。それどころか、よし、こいよと強気になっている。
　すると、横からいなせな姐さんという姿の女性が出てきて、私に向かって啖呵を切ってくる。
　この女もあいつらと仲間だったのか、と思った。
　目が醒めた。

平成二十年九月十四日

平成二十年九月十四日
　資産家の老婦人がいる。その秘書みたいな事をしている男が何処かに行くというので、私も一緒に行く。
　老婦人は「行かなくともいい」というのだが、その男の後を付けていけば、何か良いことがありそうな気がしたからだ。
　もう一人の中年男も一緒についてくる。
　家を出ると、コンクリートで出来た見上げるほどに高い建物があり、半分ほど破壊されている。
　そうか、この建物が壊れたので、保険金が入ってあの老婦人は金持ちなんだなと思う。
　男は電車に乗るので、私も改札口をくぐるのだが、地面に近いところに切符を通すような機械が置いてあるので、腰をかがめて手に持っていた切符（レシートが何枚もつながっているような長い紙）を機械の開いている口に通す。
　急な階段を上り、電車に乗り込む。
　電車の中には水色の作業服を着た男が五人ほど乗っている。いずれも似たような姿で同じように疲れたような表情をしている。
　尾行している男の姿は見えないが、私の視覚から外れた所にいることは雰囲気でわかる。
　私は席に腰掛けると、後をついてきた中年男も隣に腰掛ける。そして私の耳に「あの男は次に降りますよ、次の駅にはフィリッピンの学校がありますから」と小声で吹き込む。
　そうなのか、と思うのだが、どうしてこの男はそんな事を知っているのだと不思議に感じる。
　目が醒めた。

平成二十年九月十六日

平成二十年九月十六日
　自分の家にいる。
　私の叔父さんがいる。
　私は丸いブリキで出来ている缶から白い錠剤を二錠取り出した。
　錠剤には難しい言葉が書いてあるのだが、なぜかその錠剤を服用すると肺炎になるという事が分かっている。
　その錠剤をこっそりと叔父さんに飲ませた。それは以前、女医のハンドバッグからこっそり盗んだ物だという記憶がある。
　殺すつもりはないが、ただ病気になってくれればいいと私は思っている。
　買い物に出かけなければと思って、電車の時刻表を見る。あと一時間ほどで目的地に行く電車が出るはずだ。
　外出しようとして窓から外を見ると、いつのまにか土砂降りの雨で、前の道路が川のようになっている。
　風もひどく吹いていて、木の枝が激しく揺れている。
　これでは出かけられないなと思うが、しかし何か食料を買いに行かないと困る。
　また外を見ると、今度はそれほどでもない、道路に水たまりがあるくらいだ。これなら外に出られる。
　外出すると、知り合いの夫婦がやって来る。
「何処に行くの」と聞かれたので、〇〇まで行くのだと答える。
　いつの間にか、野外にいる。何かの集会でもあるのか、大勢の人間が集まっている。
　私の叔父さんもいる。顔色は悪く、元気はなさそうだが、まだ酷い状態というわけでもない。
　多分、あのクスリは古い物だから、ひょっとしたら効き目がなくなっているのかもしれない。そうすれば私は肺炎のクスリを飲ませたという罪悪感から逃げ出せるはずだと思っている。
　集会が終わり、解散する。車の中から若いヤツが私に向けて、親しそうに話してくる。
「まゆみはどうしたんだ？」と言っている。アイツらはいつも私に会うと、同じ事を聞いてくるなと思う。
　私は無言で、適当に手を振ると、彼らは走り去っていく。
　叔父さんが車の中にいる。
　叔父さんが、奥さんに向かって「なんか尿の切れがないんだよな」と話している。
　奥さんは眉をしかめて、またかというような表情を浮かべている。
　通りすがりに叔父さんの方を見ると、叔父さんが薄緑色のテカテカした酸素呼吸のマスクを付けているのが見えた。マスクが叔父さんの顔からはがれ落ちた皮膚のようにみえる。
　まだ肺炎にはなっていないなと思う。
　そういえば、いつ女医のハンドバッグの中からあの錠剤を盗んだのだろうかと考えた。一生懸命になって、その時の記憶を思い出すと、つい二ヶ月ほど前の事だったとわかる。

　これは、クスリの効き目がなくなっているという事は考えられない、きっと叔父さんは肺炎になるだろうなと考えた。

　目が醒めた。

平成二十年十月十二日
　二階の部屋にいると、電話が掛かってくる。ガス屋の〇地という男からだ。
　ガス機器の調子がおかしいので、見に来ると言うのだ。
　やがて男が来る。肩幅の広いがっちりとした体格の三十代の男だった。いかにも現場の人間という様子。
　話をしているうちに、〇〇という書類が必要だという言うので、男にそれを貸す。
　男はいつの間にかいなくなる。
　中途半端でいなくなったなと思う。ガス機器はいつ直るのだろうか。
　そう思った私は、家の外に出て男を捜す。近くにいるような気がしたからだ。
　家の裏側が雑木林のようになっている。奥の方まで探すが男の姿はない。
　戻ってくると、警察の鑑識課みたいな制服を着た男が二人、棒のようなものを手に持って、何かを探している。
　私は近付いて、「〇地という男を知らないか？」と聞いた。
「私達は、ここで〇〇を探しているだけですから、知りませんね」とボソボソとした聞こえにくい声で男が答えた。
　もう一人の男は、私達とは違う方向を向いて、興味なさそうに棒みたいな物を動かしている。
　そうか、あの男とは関係がないんだと思って、その場を離れる。
　家に入ると、電話があり、〇〇という書類と、今度はチャート用紙（紙に折れ線グラフが書かれたモノ）がいるから持ってきてくれと言われる。
　見あたらないので、それらを探すためにまた外に出る。
　気がつくと、大きな事務所にいる。うろうろしていると、四十代の細面の男が歩いてきてすれ違うと「ケンちゃんだろ」と言う。
　振り返ってその男を見ると、何処か見覚えがあるが、名前までは思い出せない。
　そのまま歩いていくと、向こうから二人連れの作業服を着た男が歩いてくる。
　見たとたんに、昔仕事をしていた元請けの連中だと分かる。
　私は元請けの会社の事務所にいるんだなと気がつく。あたりを見回すと、皆どこかで見たような顔だ。
　すると、後から「放火だったんだって」という声が聞こえてくる。
　何のことだろうと思って無視していると、また「放火だったんだよな」という声が聞こえる。
　いいかげんしつこいなと思う。
　あの書類とチャート用紙はどこにあるんだろうかと、本来の目的を思い出す。
　そういえば、あの書類は〇地に貸してあったんだ、どうして今まで思い出さなかったんだろう。
　ガス会社に電話してあの男に聞かなければと考えるのだが、どうしても「〇地」の〇の部分が思い出せない。

目が醒めた。

平成二十年十一月七日
　立錐の余地がないほど混雑している食堂（そばやみたい）にいる。
　注文をしようとしていくつか料理を思い浮かべる。財布を取り出すと三千円ほど入っている。これだけあれば、なんとか間に合うだろうと思い、いざ注文しようとすると、すでに目の前には料理が出ている。
　大きな皿の真ん中にエビが入った炒飯のようなものが二十センチほども積み上がっている。そのまわりに野菜が並べられている。
　いつのまに料理を頼んだのだろうかと思ったが、とにかく食べなければと食べる。
　目の前に昔の同僚で「鈴やん」と呼んでいた色黒のがっしりとした体格の男が座っている。彼の前には様々なフィギュアが並べられている。食堂にはフィギュアも売られていて、それを彼は買ったのだろう。
　しかし相当な金が掛かっているのでは、と思う。
　私の横にもセガと名前が入ったゲームのフィギュアの箱が置いてある。面白そうだなと思い手に取ると、「五百五十円」と書いてある。
　こんなものが、五百五十円もするのかと思う。よく見ると相当乱暴に扱われていたのか箱にやたらと擦れた跡がある。中古かもしれないなと思う。
　目が醒めた。

平成二十一年一月一十二日
　部屋に戻ってくると、テーブルの上に置いてある白いトレーの中に木炭のように真っ黒な色をした物が蠢いている。大きさはスーパーにあるマグロの粕漬けほどだ。
　不気味な物がいつの間に湧いてきたのだろうかと気持ちが悪くなる。
　部屋を出ると、入り口付近に拳ほどの大きさのクモが大きなクモの巣を張り巡らしている。これほどのクモの巣はいったいどれほどの時間を掛けたら出来るのだろう。
　部屋に戻ると、先ほどの気持ち悪い物体がさらに一体増えている。これは何とかしないといけないなと思い、二つのトレーから一つのトレーに不気味な物体をまとめようと考える。
　大きい方のトレーに移すために別のトレーをゆっくりと傾ける。トレーに掛かっているラップがひっかかりうまくいかないが、何回もやっているうちにやっと、不気味な物を移すことに成功する。
　あとはゴミ袋に入れるだけだと思ったが、まてよ、トレーはリサイクルのためにきれいに洗ってからスーパーにある専用の箱に入れなければいけない。といっても、いまさらあの不気味な物をトレーから取り出す勇気はない。どうしようかと考える。
　机が窓に面して置いてある。なにげなくそちらを見ると、大砲の砲弾によく似た黒光りするものがゆっくりと回転している。その物体には眼と口がある。
　柔らかなゴムで出来ているのか、ぴったりと机に張り付いてぐるぐると回転している。目を逸らしてからもう一度見ると、いつのまにか同じ物が十センチほど離れた場所に増えている。
　机に近寄る。そばに置いてある板をどかそうとすると、裏にびっしりとクモがいて、クモの巣が一面に出来ている。ウッと呻いてあわてて元に戻す。
　窓から外を見ると、近くの家の屋根が見える。屋根の上にもびっしりとクモの巣が出来ている。
　この部屋を借りるのではなかったなと後悔する。静かでいいと思ったのだが、こんな不気味な物が湧いてくるようではとても住めない。
　部屋の片隅に置いてある冷蔵庫を開ける。棚から溢れそうになるほどぎっしりとコンビニ弁当が入っている。エビフライやシャケが入っている所から見ると、幕の内弁当なのだろう。
　手前にあるシャケからなにやら汁が出て、弁当を包んでいるラップが濡れている。これは早く食べないとまずいなと思うが、食事はさっき済ませたばかりでお腹は減っていない。どうして私は四人前も弁当を買ってしまったのだろうと後悔する。
　どうしてそんなに買ったのか、その理由を思い出そうとするのだが、一向にわからない。どうせ安かったからまとめて買ったのだろうという気がしてくる。
　目が醒めた。

平成二十一年一月三十日

仕事の説明を受けている。

家の床下から金属製の管路が出ている。それをどうやって延ばして行くか検討したいので、床下にもぐり込んで家の基礎の部分にマジックで印をつけてくれという内容だった。

頭の中に床下の様子が浮かんでくる。具体的にどうやって印を付けるのか、実際に作業をしている姿が見える。そうして自分の作業をどうやって進めていくのかイメージがつかめる。面倒な仕事だなと思うけれど、元請けの依頼だからやってみるかと思う。

いつの間にか自分の家にいて、朝になっている。

仕事に行かなければと家から出る。外は山の中なのかまわりは林に囲まれている。下り道があり、正面から太陽が昇ろうとしている。まだ朝の五時くらいだろう。

仕事に行く前にデパートに寄ってバーゲン品の服を買わなければと考えている。

気がつくとエレベーターを降りている。目の前には会議室のような狭い部屋があり、机の上に服が置いてある。中年女性が五、六人いる。バーゲンなのにやけに閑散としている。一通り商品を見るけれど、あまり買いたいという気になれない。

買い物をしているのに、やけに仕事のことが頭に浮かび、集中出来ない。そこで服を買うのは諦めて、外に出る。

雨が降っている。かなり強く降っているが、それほど体が濡れることもなく、降っているのにもかかわらずそれほど気にならない。傘がないけど、このまま歩いて行ってもかまわないと歩き出す。

道は下り坂になっている。道が二股になっているところに雨水がたまりはじめている。前にもここは冠水したんだよなという事を思い出す。そのまますすむと足首まで水につかる。これはまずいなと思い、足を止めて前を見ると、雨水が右側の道路から流れ込み川のようになっている。

道路が見えずに、この先の深さがどれくらいなのかも見当が付かない。

このまま進んで行くとおぼれ死ぬ可能性もあるなと考えて後戻りしてから、まわりを見ると何人か歩いている。中年男性が無表情で肩のあたりまで水につかって歩いているのが見える。すごいガッツだなと思う。しかし、そこまでして会社に行かなければいけないのか。

どうしようと考えていると、遠くの空が青くなっている、このまま時間が経てば雨はやむだろう。とりあえず道が通れるまで家に帰っているかと考え、元の道を引き返しはじめる。

そこで目が醒めた。

平成二十一年二月二日
　こたつに入っていると部屋に男がやってくる。二十代前半のがっちりとした体格をしている。その男に見覚えはないのだが、彼は当たり前のようにこたつに入ってくる。
　そいつは「〇〇という雑誌は名前が替わったのに、まだ連載してたんだ」と言うと、こたつ板の上に積み上げてあったマンガを手に取り、読み始める。
　そんなにマンガを読みたかったのか、と思う。目の前にはスチール製の本棚が壁一面に置かれていて、そこにマンガが並んでいる。
　その本のタイトルを見ながら、私の本棚にあるマンガをもっと読ませてやろうかなと考えるが、本棚にあるマンガは全て売り物だから、汚されたりして状態を悪くすると困るから、何も言わないでおこうと考える。
　あんまり高そうなマンガはないし、どこにでもありそうなものしかないな、これじゃ売れないな、と思う。
　部屋の外に誰か来たような気配がする。すると若い女性の声がする。どうやら先ほど来た男を呼んでいるようだ。
　男は面倒くさそうにマンガから目を離さないで「そんなところで言っていないで、入ってくればいいじゃないか」と言う。
　女の声が少し近くなる。ドアを開けて部屋の中まで入ってきたのだろうと思う。しかし振り向いてどんな女なのか確かめる気にはなれない。だから私もマンガを読んでいる。
　女が私のすぐうしろで「だから、こっちに来てよ」と言っている。男はうるさそうに女の方に向くと「おまえも、マンガでも読めよ」と言う。
　なんでもいいけど、うるさいやつらだな、と思う。
　目が醒めた。

平成二十一年二月一十六日

平成二十一年二月一十六日
　四人で車に乗っている。昔働いていた同僚の家に向かっている。窓から外の風景を見ている。山道なのか背の高いススキが道ばたに生い茂っている。
　道の斜面に若い男女が腰を掛けている、どこかで見た顔だなと思う。男女から少し離れた所にぼんやりとだが人の首のようなものが浮かんでいる。車が進むにつれ、首がゆるやかに回転しているのがわかる。すれ違うときにその首の表情が見える。人間をバカにしたような薄笑いを浮かべている。
　通り過ぎてから、隣の男に「生首を見たぜ」と話しかけると、「ああ、私も見たよ」という返事がある。やっぱりあれは生首だったのかと思い、少し得意な気持ちになる。なにしろそうした怪奇現象を体験したのは初めてだったからだ。
　やがて車は目的地に到着する。
　古い農家があり、開けっ放しの玄関に知り合いが立っている。挨拶をすると知り合いの男は先頭に立って二階へと上がっていくので、私もついて行く。
　男によると「今日来てもらったのは蜂を退治してもらいたいからだ」と言うことだった。
　私は仕事よりもさっき見た生首の事を話したくて仕方ない。そう言えばあの生首の顔をどこかで見たような気がする。
　そうだあれは民主党の国会議員で自殺した男にそっくりだったと思い出す。愛知県の地元から出た男なので見覚えがあったのだ。なによりも角張った顔に特徴がある。
　近くにいた知り合いの老人に「民主党の議員で自殺した男って、四角い顔をしていなかったっけ」と聞いてみる。
　老人は興味ないのか、そっぽを向いて「ああ」とか「うう」というような声を出すだけだ。
　この老人は政治に興味があったはずだから、知らないわけはないのにどうしたんだろうと思う。なんだか私と関わり合いになるのを避けているような素振りだ。
　他にもっと相手をしてくれるヤツはいないのかとあたりを見回すと、元同僚のイムチンを発見したので、近寄ってから「生首をみたんだぜ」と自慢げに言う。
　イムチンはそうした怖い話が好きだったから、興味を持ってくれるだろう。
　彼は目を丸くして「うっそー」と言うので、「本当だよ」と言いながら私は生首と同じようにゆっくりと首を回転させながら「こんな風に回転していたんだよ」と言う。
　さらに「民主党の議員で自殺したヤツがいただろ、四角い顔をしてた男、あいつにそっくりだったんだ」と言う。
　目が醒めた。

平成二十一年四月一十六日

平成二十一年四月一十六日
　畳が敷いてある農家風の家にいる。
　六十歳過ぎの、夫婦なのだろうか男女が座って食事をしようとしている。彼らの目の前には鉢に入った大根おろしのような白っぽいものがある。
　私はそれを見ながらうまそうだなと思っている。
　右手の人差し指にささくれだっている部分があり、気になって引っ張ると、指を二周するほど皮膚がリンゴの皮をむくようにきれいに剥ける。それはヒラヒラと漂いながら、食べ物の入っている鉢の中に落ちた。
　皮膚が剥けた人差し指が、かすかにひりついて痛い。
　鉢の中に落ちた自分の皮膚を見ると、三ミリほどの幅をした白色の物体で、丸くカールしている。食べ物の中に落ちたのはまずいなと思い、見つからないうちに拾わなければと思う。
　ばあさんが近付いてくると、鉢を手に取る。私の皮膚に気がついたのかびっくりしたようにそれを見つめている。
　そりゃ、いきなり見慣れない物が入っていたら誰でも驚くよなと思いながら、それをばあさんに告げるべきか私は迷っている。
　ばあさんは物体を見ながら何かを思いついたのか、急に顔色が変わり、真剣な表情をすると、服装を正して、正座をした。気がつくとじいさんも正座をしている。
　ばあさんは私の方を見ている。何かを訴えるような顔だ。あの物体を見て何かのお告げでもあったとばあさんは勘違いをしたなと直感したが、そんな事を言い出せないような雰囲気になっている。
　そこで私も求められている自分の役割を果たさなければと思い、背筋を伸ばしてから正座をする。厳粛な裁判官のような表情をしてみせる。
　ばあさんは私を見ると準備が整ったというように「実は……」と話し始める。
「私は罪深い女です。昔のことでございますが……」
　ばあさんは自分が犯した犯罪の懺悔をしたいらしい。あの物体がどう関係するのだろうかと思いながら私は聞いている。
　やがてばあさんは話し終え、私の方を見た。
　それを合図に私は姿勢を正すと「そうですか、過去は過去として、現在を生きなければなりません……」と話し始める。
　話しながらどうしてこんな事を言っているのだろうかと思う。それにボソボソと話している自分の声が気に入らない、俳優のようにはっきりと響くような良い声で話せたらいいのにと思う。
　こんな声では自分に求められている役割が果たせないではないか、ばあさんはどう思っているのだろうと気になるが、ばあさんの表情を見ることが出来ない。
　目が醒めた。

平成二十一年四月三十日

平成二十一年四月三十日
　広い倉庫のような場所にいる。図面を見せられる。天井裏の迷路を抜けて次の部屋に行くように指示を受ける。
　図面によると天井裏に上りまっすぐ行き、左に曲がると長方形の中に「シフト」と描いてある。その場所に行きシフトを開けると次の部屋に出られるということらしい。
　さっそく天井裏に上がるが、真っ暗で何も見られない。
　これでは確実に迷子になるなと思い。一度出て、じっくりと図面を確認してからにしようと思う。降りてから図面を見て、どれだけ進んでから、左に曲がるのかチェックする。
　これで良いだろうと思い、もう一度上がろうと、あたりを見回すと、いつのまにかロッカーが規則正しく並んでいる。これではロッカーに登らないといけないなと思う。
　近くに小さな踏み台があるので、ロッカーの横に置いて上がろうとする。
　軍隊の服装をした男がいきなり現れると、私の方を見つめる。
　私は自分の身分を証明するために、ズボンの右ポケットに手を入れる。たしか身分証明書が入っていたはずだと思ったからだ。
　カードのようなものに手が触れたので、それを出して男の方に向ける。男は無表情にこちらを見ている。
　手にしたカードを見ると、ゲームのキャラクターカードのようだ。アニメ顔の男が印刷されている。
　もう一度ポケットからカードを出してみると、これも違う。なによりもペラペラと薄っぺらくて、振り回しただけで、曲がって揺れている。
　今度は左にあるポケットからカードを取り出す。今度のカードは運転免許書のように顔写真が貼ってあって、しっかりとした作りになっている。
　これなら大丈夫だろうと、男にカードを見せると、相変わらず無表情だが、きびすを返すとどこかへと消えていった。
　なんだ最後まで、あの男は何もしゃべらなかったなと思った。踏み台を使ってロッカーに上がり天井の板を外して、天井裏にもぐり込む。
　匍匐前進しながら、暗闇の中を進む。
　目が醒めた。

平成二十一年五月九日
　広い事務所のような所に来ている。どうもこの会社に出向して働くことになっているらしい。会議室に置いてあるような長い机に座っている。
　四件分の完工書類を作成することになっているらしい。
　目の前には、以前にやった仕事の見積書が置かれている。どうやらこれを参考にしろということのようだ。
　見積書に目を通すと、競馬の本〇〇円という項目がある。ははあ、きっと現場事務所で担当者に本をたかられたなと思い、その担当者の顔が浮かぶ。こんな事まで露骨に請求してもいいのかと思う。最近はそれが通用するんだろうなと考える。
　さらに目を通すと、やたらと細かい物まで詳細に請求している。それに請求書の字が９ポイントくらいの細かい活字で書かれている。いつからこんなマメな仕事をするようになったのだろうかと、女子事務員の姿を思い出すのだが、彼女にこんな事が出来たかな、と不思議に思う。
　そんな事を考えているが、肝心の工事についての資料が見あたらない。私が座っている机にはだれもいなくて、少し離れた所には五・六人の人間が忙しそうに働いている。
　これでは仕事が出来ないなと思いながら、ここは私の働いている会社よりも近い場所にあるので、出勤するのは楽だなと、つまらないことを考えている。
　次の日、出勤してくると誰もいない。おかしいなひょっとすると今日は休日なのかなと思うが、たしかに平日だったと思い出す。
　一階には誰もいないので、二階に上がる。しかしそこにも誰もいない。六畳の部屋にはテレビが置いてある。
　テレビ画面の中に映像が映し出されている。いつのまにか私はその画面の中にいる。
　車の助手席に座っている。自動車は山の中を凄いスピードで坂道を登っている。右手から黒い物体が駆け下りてくる。よく見ると小柄な熊だ。
「すげえ、熊だよ」と驚いた私は運転席に向かって話しかけるが、返事はない。それどころか運転している人間の姿が見えない。
　自動車はさらにスピードを上げ、直角に近い崖のような場所を走っている。山肌が黄色っぽくなった砂のような場所を選んで走っているようだ。さらに熊が三匹現れて、驚いたようにこちらを見ている。私は車で良かった、これが歩きだったら、怖かったなと考えている。
　やがて陽の差さない山道のような所で止まると、向こうから二人の男が横に並んで現れた。
　一人は細身の体に浅黒い顔をしている。もう一人は白っぽい顔なのだが、どんな表情なのかははっきりしない。二人とも、ど派手な服を着て、何か歌いながら踊っている。
　浅黒い顔をした男に見覚えがあるなと考えていると、歌手のプリンスに似ているなと思う。しかし、本物のプリンスにあるような知性が感じられない。
　プリンスのそっくりさんなんだなと思う。たぶん白人と黒人、二人あわせてセットになっているのだろう。そう考えていると、テレビ画面に「ノイズ×ノイズ」というタイトルが現れる。そう

なんだ、そういうタイトルの番組だったんだ、と思った。
　目が醒めた。

平成二十一年七月十九日

平成二十一年七月十九日
　歩道橋を降りている。かなり急な傾斜がついているので、目の前の階段に注意を払っている。
　私の前に小学生らしき二、三人の集団がいて、非常に邪魔だ。
　彼らはおしゃべりをしながらダラダラと歩いている。最近のガキは本当に他人に迷惑をかけているとか思わないのか、と腹が立つ。左手を階段の手すりにかけ、スピードを上げテンポ良く小走りで小学生の集団を追い抜く。なんだか爽快な気分になる。
　歩道橋を渡ると、大きな交差点が広がっている。立ち止まり、どの道を行けばいいのか考える。目的地に行く最短の方法を思い出したので、交差点を渡る。
　また歩道橋を降りる。その途中で胸ポケットに入れてあったイヤホーンの白いケーブルが飛び出して、横に座り込んでいる少女の頭に乗っかるのが見えた。
　あわててそのケーブルを取り「すいません」とあやまる。
　メガネをかけた女子高生が上目遣いに咎めるような視線を私に向けるのが見えた。あわてて走り去る。
　うしろで「あんた、そんなに怒るような事じゃないでしょ」と女性の声でいさめているのが聞こえる。
　いや、十分怒るような事なんだけどな、と思う。目の前に広い道路が見えてくる。あの道路に出て少し行けば、古本屋があるから、ちょっと寄ってみるかなと思うと、心が弾む。
　目が醒めた。

平成二十一年十月十四日

平成二十一年十月十四日
　誰もいない部屋で、うどんを作っている。卵を入れる。するとうどんの下の方から煮だって硬くなった卵が出てくる。
　なんだ、自分で卵を入れたことを忘れて、もう一つ卵を入れてしまったのかと驚く。数分前の事を忘れるなんて、どうした事だ、と思ったからだ。
　それほど腹が空いているわけでもないのに、卵を二つも食べられないと思う。すると急に腹が重たくなる。
　しかたないので、あとから入れた卵を取り出して、ゴミ袋に入れる。
　ゴミ袋は透明になっていて、捨てた卵からドロっとした黄身があふれ出す。
　袋からあふれ出てくるような気がして、袋越しに触る。どうやらちゃんと袋の中にあるようだ。安心する。
　うどんがどうなっているのか、戻って確認する。するとどうだ今度は卵の六個パックがそのまま入っている。どうなっているのだ。あわててそれを取り出して、またゴミ袋に入れる。

　学生になっている。帰省したのか自分の部屋にいる。母親が私を呼ぶ声がするので、居間に行く。
　母親がトウモロコシを体中に貼り付けて、さらに白く薄い布でトウモロコシが落ちないように巻き付けている。
　布の一部分からそのトウモロコシが見えるので、そうだと分かる。トウモロコシは茹でる前の生のものだ。薄い黄色の色から判断出来る。茹でたトウモロコシのような張りのある黄色とは違うくすんだような黄色だ。
「こうやってトウモロコシを体に巻き付けると、健康に良いんだよ。かあさん今日は熱が出て調子が良くないんだよ」と言う。
　声が若い。まるで三十代のようだ。顔色は良くないが、しかし母親というよりも姉と言っても良いくらい若く見える。
　そして何かブツブツと言い始める。どうやら自分が言ったことを、私に書き留めて欲しいらしい。
　かたわらに用紙がある。印刷したものをまとめたものらしい。A4くらいの用紙に青い字で縦に二段組みになっている。自分の知り合いについてデータベースのようにまとめたものらしい。「料理部〇〇さん」とか「〇〇さん」という名前が書いてあり、その下にその人間がどういう人なのか記述されている。
　母親が何か言っているのだが、聞き取りにくい。何かを思い出すように、ゆっくり話をするし、どうも相手の事を気に入っていないらしくて、時々感情的な悪口を言っている。
　目が醒めた。

平成二十一年十月二十日

平成二十一年十月二十日
　私は旅館の前を掃除している。どうやらバイトでやっているらしい。
　きれい好きの女将が先頭に立ってほうきで掃いている。
　だから私も負けずに掃除をする。
　女将は落ちている枯れ葉を、ちり取りに入れている。
　何かよく聞こえないのだが「こうやるのよ……」というようなことを女将は話しているらしい。
　私は店先から少し離れたところに移動して枯れ葉を集める。

　喫茶店でおじさんと話をしている。
　不愉快な話をしたくないので、先ほど経験したことを話そうと考える。
「実は、さっき面白い話をしたので……」と話し出す。
「最近、遺体を買ったのですが、それが」
　と話し出して、さっき遺体を買った面白い経験をしたはずなのに、それがどんな話だったのか思い出せないことに気がつく。
　そういえば、あれは夢だったっけと考える。
　目が醒めた。

平成二十一年十一月二十八日
　サラリーマンになっている。年齢は三十代くらいだろう。今日は宴会というので、社員一同大きな宴会場に繰り込む。
　会場に着いたので、向かって右手の部屋を開ける。まだ誰もいなくて、電気すらついていないので真っ暗だ。
　振り返って、うしろにいた幹事らしき人間に「私はどの部屋なんでしょうか」と尋ねる。すると「君はそうだね」と言いながら部屋の割り振り表を取り出してみている。
　その表をのぞくと、社長他幹部社員と一般社員の二部屋に別れているようだ。一般社員は「１３１１」と青い文字で書いてある。
「君は１３１１号室だね」と言われる。その部屋は今開けた部屋の隣であった。
　部屋に入ると、宴会が始まる。隣には私の上司が座っている。四十代くらいの堅物そうに見える男だ。つまらなそうな表情をしている。
　近くには女子社員が二人見える。こちらは華やいだような歓声を上げている。
　なかなか宴会は盛り上がらないな、と思っていると、上司が立ち上がり「私は写真展に行かなければなりませんので、このへんで失礼させてもらいます」と言う。
　どうしてわざわざ宴会の途中で上司ともあろう人間が出ていくと言うのだろうか、そんなにその写真展とか言うのは大切なものなのだろうか、と思っていると、誰かが「そんなに写真展が大事なのか」と言う。
　上司は「これでも私の写真は『ベストオブ茨城』に二十四枚もなっているんですよ」と冷静な様子で言う。
　二十四枚もそのベストオブ茨城になっているなんて、凄いなあと素直に感心する。一枚とか二枚じゃなくて二十四枚もなるなんて、どれだけの年月を掛けているんだと思ったからだ。その量に圧倒されたというわけだ。
　正面にいた軽薄そうな若い社員が「にじゅうよんまい」と節をつけて大きな声で言う。ふざけているような、はやし立てるような、そんな感じだ。
　なんだか面白くなってきたなと思い、傍にあるお猪口を取り飲み干す。酒の味は感じられないけれど、気分が高揚するのがわかる。
　若いヤツに合わせておもいっきりはしゃぎたくなる。そこで「にじゅう」と言って、二本指を突き出し「よんまい」と言って、指を四本突き出して、若いヤツと一緒に大きな声で言う。
　チラリと女子社員の様子をうかがう、彼女らはバカにしたような、面白がっているような表情をしている。
　もう一度同じようにはやし立てながら、私だって小説が何回か入選したことがあるんだぜ、と思う。
　それを知ったら女子社員はどんな反応を示すだろうか、なんとか私の自慢話を彼女らに聞かせたいモノだなと思いながら、軽薄な若いヤツに合わせて、「にじゅう　よんまい」と何回も言う

。

　目が醒めた。

平成二十一年十二月二十三日
　夜なのか薄暗い。場所は郊外の森の中にある空き地のようだ、まわりに木が見える。
　大勢の人間が集まっている。私はその中にいるブロンドの若い女性と仲がいいらしい。
　その女性といちゃついていると、一人の男が現れる。
　男が大きな声で何か言うと、皆がそれに注目する。
　いつの間にか、ばらばらの群衆が、学校の校庭に集まった小学生のように規則正しく整列している。
　男には威厳が感じられる。教師のようでもあり、神父のような聖職についているようにも見える。
　男が話し終わると、列の先頭にいた人間の後から長い棒のようなモノが伸びる。棒と言うよりも物干し竿のように長い。
　私は先頭に立っている。
　棒にある三番目の節目から突起物が出ている。
　先ほど私といちゃついていた女性がその三番目の突起物にまたがるように座る。
　どうやら私と仲のよい女性がその場所に座るように出来ているらしい、ということがなんとなく分かる。
　要するに先頭に立っている人間と仲の良い、あるいは、その人間に気がある人がそこに座るという仕組みなのだろう。
　突起物は一カ所にしかないので、そこからあぶれた他の人間は棒の違う場所に座る。次々と場所が埋まっていく。
　あたりを見渡すと、人間が隙間なく埋まっている列と、空き場所が目立つ列があることが分かる。
　私の列にはあの女性と二三人の人間がいるだけだ。女性はうれしそうな表情をしている。性的な興奮がその表情に表れている。
　私はなんだか恥ずかしいような、そうした感情とは別にもっと注目してほしいという複雑な思いを抱く。
　しばらくすると私は別の場所にいる。目の前には一人の男がいるのだが、男の列には私の他には誰もいない。
　どうも、私があいつの突起物にまたがるしかないような状況である。しかたなく前に進んで突起物に腰を下ろすのだが、なんとも嫌な気分である。というのは、どうして男同士でこんなことをしなければいけないのだろうと思っているからだ。
　やりたくもないことを無理矢理にさせられているという状況を言い訳にしているのだが、心の底では、それを楽しんでいるという気がするのだが、これは表には出してはいけない感情であるとわかっていて、自分では仕方なしにやっているのだ――という気持ちがあるようなのだ。
　腰を下ろすとお尻に突起物が当たって少し痛い。

なんで私が男の突起物にまたがらなければいけないのかと思うと情けなくなる。
しかしその情けないという感情には、それを楽しんでいるような被虐的なモノが混じっているのが分かる。
目が醒めた。

平成二十一年十二月二十五日
　私は女子高生になっている。まわりには制服を着た少女が四人いて、私に友達のように話しかけてくるので、たぶんそうなのだろうと思う。
　繁華街のようなところにいるのだが、人のいる気配がまったくしない。廃墟というよりは人通りがまったくなくなった早朝の街といったところだ。
　誰からともなく歩き出す。私も彼女らの後についていく。
　誰もいない商店街を抜けると、駅が見える。
　高架型の駅で、高いところに駅舎がある。
　それを見た時、懐かしいところに来たなと思う。
　これは引っ越し前にすんでいたところだ。
　以前すんでいたマンションに足が自然と向かう。
　暗い階段を上がり、昔いた部屋の前にくる。ドアを開けようとするが、当然のように鍵が掛かっていて開かない。
「開かないよ」と私が言うと、隣の女が「私がやってみる」と言いながら鍵をどこからか出してくる。
　どうせダメだろうと思ったので、隣の部屋に私は向かう。すると「開いた！」という声が聞こえる。
　どうして彼女が鍵を持っていてどうしてそれで開いてしまうのか、不思議に思ったが、とにかく部屋に入ろうと考える。
　部屋の中は真っ暗である。私は左手にあるブレーカーの紐を引っ張る。するとショートしたような青白い光が一瞬見え、すぐに部屋に明かりがともる。
　部屋の奥に進んだ私は、その様子を見て「キャー」と悲鳴を上げた。
　カーペットの上に、肌色をした猫の手足みたいなモノが六つころがっている。その横にはそれをもう少し大きくしてマンガ化したようなモノがこれも六つ置かれている。
　大きい方はぬいぐるみに似た素材で出来ている。
　なんだかかわいいようでもあるが、あまりにシュールな光景で気持ちが悪い。
　目が醒めた。

平成二十一年十二月三十一日

平成二十一年十二月三十一日

　中華料理店のようなところで麻雀をやることになった。

　私は待合室のような場所でソファーに座っている。他の三人はテーブルについている。

　どうも私は一人だけ離れた所から麻雀をするつもりのようだ。他の人間もそれを不思議に思っていないようで、普通に会話をしている。

　麻雀が始まり、一巡したときに、私は普通に席について麻雀をしたくなる。ソファーから立ち上がると、席につく。

　誰かが「今日は普通に席についてやるんだな……」と言う。

　席につくと、パリッと焼けた結婚式で出てくる鯛のお頭みたいな料理が並んでいる。食べたら塩味が効いた魚独特のうまみが口の中に広がるようで、うまそうだ。良い料理が出ているんだな、と思う。

　私の下家は若い男性だ。アニメに出てくるような整った顔をしている。他の二人は中年男性で、ギャンブルに強そうな癖のある顔をしている。

　親の手はかなり良さそうだ。私の手牌はあまり良くない。直ぐに上がれるようなものではないので、取りあえず振り込まないようにして、様子を見ることにする。若い男は、おどおどしながら打っているので、きっとたいしたヤツではないなと思う。

　何巡かするうちに、目の前の料理が刺身のようなものに変わっている。なんだか生臭いようで、あまりうまそうな感じがしない。

　目が醒めた。

平成二十二年十月七日

平成二十二年十月七日
　良い天気だ。昼の一時に式典があるので、それに間に合わせる必要があると考えながら、坂道を上っている。気持ちは沈み込んでいる。
　時間を確かめるために、腕時計を見るが、十時四十分を示したまま止まっている。私は時計をはめたことがないのに、どうして腕時計をしているのか、と疑問を感じるが、そうだこれは親父の形見だったと思う。
　道路の両脇には大木が並んでいて大きく枝を伸ばしている。それを見ていると枝が血管のように見えてくる。
　そう言えば、前世では自殺したんだよな、とふと思い出す。たしか人生に絶望して投身自殺をしたんだっけと記憶がよみがえり、身を投げる光景が脳裏に浮かぶ。
　自殺なんかしたらさぞかし母親は悲しんだだろうなと思うと、どうしてそんな事をしたのかと今更ながら思う。しかし私が自殺したときには母親は病気で亡くなっていたはずと思い出す。
　誰ともわからない群衆と狭い道を上っていく、どうやら墓場のようだ。やがて頂上にたどりつく。私は左手に途中で拾った木の枝を持っている。皆が腰をかがめて黙祷しはじめたので、私も木の枝を置いて祈り始める。
　すると姉の声が聞こえる。
「どうしてちゃんとした花を持ってこないで、そんな木の枝を持ってくるの」
　うるさいな、こんな時にまで小言を聞きたくない。それに木の枝は持ってきたわけではなく、拾ってきただけだ。
　そんな怒りに似た感情が浮かぶ。

　朝起きて、そうだ町にでも出てみるかと思う。持っている財布を見ると小銭で八百円しかない。
　これでは、何も買えないなと思いながら、玄関を出ると、後ろから若い女性が出てくる。目鼻立ちのくっきりとした、二十代前半の女だ。性格はさっぱりとしていて、気楽に話すことが出来るような女性だ。
　女は「これから新宿に行かないといけないの」と言う。
　新宿か、私もそんなところに行きたいなと思うが、いかんせん所持金が少なすぎる。
「私なんて、八百円しか持ってないんだぜ」
　私の言葉にクスクスと女は笑う。馬鹿にしているような笑いではなく、しょうがないわねというようなものだった。
　二人で一緒に外にでて、歩き出す。
「実は私は前世で自殺したらしんだ」
　女はびっくりしたように私の顔を見る。
「母親がさぞかし悲しんだだろうと思ったら、実はそのときには両親ともなくなっていたのさ」

女は青ざめたような表情をして、驚くというよりは悲鳴に近い大きな声を出す。
目が醒めた。

平成二十二年十月二十日

平成二十二年十月二十日
　女性から電話が掛かってくる。用件は私を助けて欲しいので、一緒にテレビ番組に出てくれないか、というものだ。
　電話で話しているのに、女性の姿が見える。
　女性というのは、四十代の小柄な体型、上品で清楚な顔立ちをしている。最近有名になったタレントというか有名人で、自分のためなら殺人もいとわない冷酷な性格をしていて、実際に六人ほど殺しているという噂がある。
　その女性がそんな事をしていないという弁護番組を作るので、私に参加してくれないかというものだった。
　最初は、どうして私がそんなものにでなくてはいけないのか、と思っているのだが、次第に説得されて参加することを承諾する。
　女性の姿を見ているうちに、助けなくてはいけないような気持ちにされたからだ。
　テレビ局に行く。
　薄暗い廊下を進むと、その女性と五十代くらいの男性が二人して対談しているのが見える。

　男性は元刑事で犯罪がらみのコメンテーターだ。あいつもあの女性に丸め込まれたんだなと思う。
　女性を見ていると、とても六人も殺した人間には見えない。愛らしく守ってあげたいと誰でも思うだろう。
　あれが本心は冷酷で自分の事しか考えないような人間なんだから、女性は怖いなと感心する。
　収録が終わり、対談していた二人と、プロデューサーみたいな軽薄なヤケに愛想の良い男が出てくる。
　その男は「２００号室を予約してあるので、来てくれ」と私に言うと三人して部屋を出て行く。
　私も後ろをついて行くと、女性が「北アイルランドで少女の幽霊をわたしが目撃したという事にするので、あなたがそれを認めてくださいね」と言う。
　どうやら私は霊媒師のような役割を与えられたというわけらしい。
　きっと、その少女の幽霊とやらも、彼女が無実ということにつながっているのだろうなと感じる。
　受付みたいな場所で部屋の番号を言うと、中年男が小さなカードみたいなものを渡してくれる。
　中年男は「苦労して予約を取ったんだから、本来ならこんなに簡単に渡せるものじゃないんだよ」と言う。
　口調からして不機嫌そうだ。どうして私がそんなことを言われるのだと思うと腹が立つ。
　すると隣の男が私の顔色を見て、なだめるように四枚のカードをくれる。こんなにカードを

もらっても何に使うんだと思うがちょっと機嫌が直る。
　部屋を探して通路に出る。
　目が醒めた。

平成二十二年十月二十二日

平成二十二年十月二十二日
　旅行先で元同僚の「鈴やん」と会った。
　彼は「おかげで大漁だったよ、おみやげの高級食材を持ってきたから食べてくれ」と言って、荷物を置いていった。
　開けてみると、冷凍のカニがぎっしりと詰まっていた。他にも魚のフライみたいな物も入っている。
　あとで食べようと思って、布団の中に入れる。
　いつのまにか自宅に帰っている。
　布団を開けると冷凍時そのままの食材が出てくる。食材を冷蔵庫に入れながら、これだけあれば当分食べるものは買わずにすむなと思う。
　なんだかもうかったような気になり、うれしくなる。
　首筋に何かヌメっとしたものが落ちてくる。何が落ちてきたんだと天井を見上げる。
　天井の白い壁紙に数十のピンク色したヒルみたいなものがはり付いていた。白い蛆のようなものも見える。
　いったいどうしたんだ。ひょっとしたら二階に置いてある生ものが腐って、蛆やヒルが発生したのかもと考えた。
　二階に行くと、天井にびっしりと水滴がついている。奥に行くと噴水のように水が吹き出ているところがある。
　ぼんやりとそれを見ながら、どうしようかと悩む。これだけひどいと、業者を呼んでもどうにもならないような気がした。
　目が醒めた。

夢の終わり

夢の終わり

皆様、お楽しみいただけたでしょうか。
それでは、またお会いしましょう。

猫吉

奥付

夢日記

http://p.booklog.jp/book/56288

著者 : 猫吉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/nekokiti2001/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/56288

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/56288

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ